

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教 育 学 ）	氏名	徐 芳 芳
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
<p>論 文 題 目</p> <p>中国語を母語とする日本語学習者の日本語文章の理解・記憶における説明予期の効果 —読解前教示を操作した実験的検討—</p>			
<p>論文審査担当者</p> <p>主 査            教 授            松 見   法 男</p> <p>審査委員        教 授            中 條   和 光</p> <p>審査委員        教 授            深 澤   清 治</p>			
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>本論文は、中国語を母語とする日本語学習者（以下、学習者）を対象とし、認知心理学における学習促進現象の一つである説明予期の効果が、第二言語の文章読解においてみられるか否かを実験的に検討したものである。具体的には、読解前教示を操作し、学習者が日本語の説明文を読む際に、文章内容の説明予期が、文章のテキストベースレベルの理解・記憶を促進するか否かを調べた。説明予期の効果が、説明予期の教示内容や学習者の日本語習熟度、およびテスト時期の違いにより異なるか否かを明らかにし、その原因を考察した。</p> <p>論文の構成は、以下のとおりである。</p> <p>第1章では、説明予期の効果に関する先行研究を概観し、本研究の問題と目的を述べた。近年、母語の読解研究では、説明予期が読み手自身の文章の理解・記憶を促進する効果が実証されている。説明を予期すると、文章内容の精緻化・構造化といった深い処理が積極的になされ、文章理解が促進されると考えられている。しかし、第二言語の文章読解における説明予期の効果については、未だ実証的研究が少なく、母語話者を対象とした先行研究の知見が適用できるかどうかについても吟味されていない。本研究では、これらの点を検討するため、4つの実験を行う。</p> <p>第2章では、実験的検討について述べた。第1節では、説明予期の条件をテスト予期の条件と比較し、学習者の日本語習熟度とテスト時期が説明予期の効果の現れ方に影響を及ぼすか否かを検討した。実験1では上級学習者を、また実験2では中級学習者を対象とし、説明予期条件とテスト予期条件の読解直後および遅延事態での文章の理解・記憶成績と、読解方略の使用様相を調べた。その結果、説明予期の効果は上級学習者ではみられたが、中級学習者ではみられなかった。学習者の日本語習熟度は、説明予期の効果の現れ方に影響を及ぼすと言える。上級学習者では、説明予期が、読解直後における文章内容の理解・記憶と、遅延事態における文章内容の長期的な保持を促進する。上級学習者の説明予期条件では、文章の重要点だけでなく、他者に教える時に重要であると考えられる例示情報の理解・記憶にも注意が配分されていることがわかった。他方、中級学習者では、説明予期条件とテスト予期条件で類似した読み方がなされていることがわかった。中級学習者は、基礎的な言語情報の処理効率が低いため、眼前の言語情報の理解・記憶にほとんどの処理</p>			

資源を費やす。読んでいるときに、他者の理解状態や知識レベルを想定し、他者への説明を行うことに上手く注意が配分できなかったと考えられる。第2節では、説明予期の条件を、説明文産出の条件および要約文産出の条件と比較し、説明のプランニングという観点から、学習者の日本語習熟度とテスト時期が説明予期の効果の現れ方に影響を及ぼすか否かを検討した。実験3では上級学習者を、また実験4では中級学習者を対象とし、説明予期条件、説明文産出条件、要約文産出条件の読解直後および遅延事態での文章の理解・記憶成績と、読解方略の使用様相を調べた。その結果、説明予期の効果は上級学習者でも中級学習者でも認められた。説明のプランニングを行う説明予期は、日本語習熟度の中級・上級の双方で、読解直後における文章の理解・記憶と、遅延事態における文章内容の長期的な保持を促進する。読解後の説明を想定し、それをプランニングすることによって、文章を読む際に、分析的な視点を持つことができ、メタ認知方略を含めた読解方略を積極的に使用できたと考えられる。

第3章では、4つの実験について総合考察を行い、本研究の意義と発展課題を述べた。説明のプランニングを行う説明予期条件では、学習者が他者に説明するつもりで文章を読む際に、メタ認知の働きが促され、自身の理解状態をモニタリングすると同時に、他者の理解状態と知識レベルを推測し、文章の主旨とそれを支える例示情報など、他者への説明に重要だと考えられる情報を選択して、それらの理解・記憶に注意を配分する。学習者は、文章から読み取れる複数の情報を関係づけ、内容を統合して体制化していく。このような能動的な読みを通して、文章内容の精緻化が行われ、長期記憶への豊かな符号化とともに強い記憶痕跡が形成されると言える。本研究の結果は、母語の読解研究における説明予期の効果に関する知見が、第二言語の読解研究にも適用できることを示唆する。

本論文は、次の3点で高く評価できる。

1. 日本語教育の分野において、認知心理学で探究されてきた説明予期の効果を新たに取り上げ、母語の文章読解だけでなく、第二言語の文章読解においても、その現象が認められることを実証した。
2. 日本語の文章読解における説明予期の効果について、説明予期の教示内容、学習者の日本語習熟度、テスト時期を要因として設定した体系的な実験を行い、説明予期の効果が現れる諸条件を明らかにした。
3. 説明予期の効果がみられた場合の原因を考察するため、文章の理解・記憶成績だけでなく、読解方略の使用に関する質問紙調査も実施し、学習者の読みのプロセスの一側面を解明してモデル化した。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成28年2月10日